

坂口安吾

続墮落論



続
墮
落
論

敗戦後国民の道義頹^{たい}廃^{はい}せりというのだが、しからは戦前の「健全」なる道義に復することが望ましきことなりや、賀すべきことなりや、私は最も然らずと思う。

私の生れ育った新潟市は石油の産地であり、したがって石油成金の産地でもあるが、私が小学校のころ、中野貫一という成金の一人が産をなして後も大いに儉約であり、停車場から人力車に乗ると値がなにがしか高いので万代橋という橋の袂^{たもと}まで歩いてきてそこで安い車を拾

うという話を校長先生の訓辞において幾度となくきかされたものであった。ところが先日郷里の人が来ての話に、この話が今日では新津某という新しい石油成金の逸話に変わり、現になお新潟市民の日常の教訓となり、生活の規範となっていることを知った。

百万長者が五十銭の車代を三十銭にねぎることが美德なりや。我らの日常お手本とすべき生活であるか。この話一つについての問題ではない。問題はかかる話の底をつらぬく精神であり、生活のありかたである。

戦争中私は日本映画社というところで囑託をしてい

た。そのとき、やっぱり囑託の一人に〇という新聞聯合の理事だか何かをしている威勢のいい男がいて、談論風発、吉川英治と佐藤紅緑が日本で偉い文学者だとか、そういう大先生であるが、会議の席でこういう映画を作ったらよかろうと言って意見をのべた。その映画というのは老いたる農夫のゴツゴツ節くれた手だとかツギハギの着物だとか、父から子へ子から孫へ伝えられる忍苦と耐乏の魂の象徴を綴り合わせ映せという、なぜなら日本文化は農村文化でなければならず、農村文化から都会文化に移ったところに日本の墮落があり、今日の悲劇がある

からだ、というのであった。

この話は会議の席では大いに反響をよんだもので、専務（事実上の社長）などは大感服、僕をかえりみて、君あれを脚本にしないかなどと言われて、私は御辞退申上げるのに苦勞したものであるが、この話とてもこの場かぎりの戦時中の一場の悪夢ではないだろう。戦争中は農村文化へかえれ、農村の魂へかえれ、ということが絶叫しつづけられていたのであるが、それは一時の流行の思想であるとともに、日本大衆の精神でもあった。

一口に農村文化というけれども、そもそも農村に文化

があるか。盆踊りだのお祭礼風俗だの、耐乏精神だの本能的な貯蓄精神はあるかも知れぬが、文化の本質は進歩ということ、農村には進歩に関する毛一筋の影だにない。あるものは排他精神と、他へ対する不信、疑ぐり深い魂だけで、損得の執拗しつような計算が発達しているだけである。農村は淳じゆんぼく朴だという奇妙な言葉が無反省に使用せられてきたものだが、元来農村はその成立の始めから淳朴などという性格はなかった。

大化改新以来、農村精神とは脱税を案出する不撓不屈ふとうの精神で、浮浪人となって脱税し、戸籍をごまかして脱

税し、そして彼ら農民たちの小さな個々の悪戦苦闘の脱税行為が実は日本経済の結び目であり、それによって荘園が起こり、荘園が栄え、荘園が衰え、貴族が亡びて武士が興った。農民たちの税との戦い、その不撓不屈の脱税行為によって日本の政治が変動し、日本の歴史が移り変っている。人を見たら泥棒と思えというのが王朝の農村精神であり、事実群盗横行し、地頭はころんだときでも何か擱つかんで起き上がるという達人であるから、他への不信、排他精神というものは農村の魂であった。彼らは常に受身である。自分の方からこうしたいとは言わず、

また、言い得ない。その代わり押しつけられた事柄を彼ら独特のずるさによって処理しておるので、そしてその受身のずるさが、孜々^{しし}として、日本の歴史を動かしてきたのであった。

日本の農村は今日においてもなお奈良朝の農村である。今日諸方の農村における相似た民事裁判の例、境界のウネを五寸三寸ずつ動かして隣人を裏切り、証文なしで田を借りて返さず親友を裏切る。彼らは親友隣人を執拗に裏切りつづけているではないか。損得という利害の打算が生活の根柢で、より高い精神への渴望、自我の内

省と他の発見は農村の精神に見出すことができなない。他の発見のないところに真実の文化がありうべきはずはない。自我の省察のないところに文化のありうべきはずはない。

農村の美德は耐乏、忍苦の精神だという。乏しきに耐える精神などがなんで美德であるものか。必要は発明の母と言う。乏しきに耐えず、不便に耐え得ず、必要を求めるところに発明が起こり、文化が起こり、進歩というものが行なわれてくるのである。日本の兵隊は耐乏の兵隊で、便利の機械は渴望されず、肉体の酷使耐乏が謳歌おうか

せられて、兵器は発達せず、根柢的に作戦の基礎が欠けてしまつて、今日の無残きわまる大敗北となつている。あに兵隊のみならんや。日本の精神そのものが耐乏の精神であり、変化を欲せず、進歩を欲せず、憧憬どうけい讚美が過去へむけられ、たまさかに現われいでる進歩的精神はこの耐乏的反動精神の一撃を受けて常に過去へ引き戻されてしまふのである。

必要は発明の母という。その必要をもとめる精神を、日本ではナマクラの精神などと言ひ、耐乏を美德と称す。一里二里は歩けという。五階六階はエレベーターアなどと

はナマクラ千万の根性だという。機械に頼って勤労精神を忘れるのは亡国のもとだという。すべてがあべこべなのだ。真理は偽らぬものである。すなわち真理によつて復讐せられ、肉体の勤労にたより、耐乏の精神にたよつて今日亡国の悲運をまねいたではないか。

ボタン一つ押し、ハンドルを廻すだけですむことを、一日中エイエイ苦労して、汗の結晶だの勤労のよろこびなどと、馬鹿げた話である。しかも日本全体が、日本の根柢そのものが、かくのごとく馬鹿げきっているのだ。

いまだに代議士諸公は天皇制について皇室の尊厳など

と馬鹿げきったことを言い、大騒ぎをしている。天皇制というものは日本歴史を貫く一つの制度ではあつたけれども、天皇の尊厳というものは常に利用者の道具にすぎず、真に実在したためしはなかつた。

藤原氏や將軍家にとって何がために天皇制が必要であつたか。何がゆえに彼ら自身が最高の主権を握らなかつたか。それは彼らがみずから主権を握るよりも、天皇制が都合がよかつたからで、彼らは自分自身が天下に号令するよりも、天皇に号令させ、自分が先ずまっさきにその号令に服従してみせることによつて号令がさらによく

行きわたることを心得ていた。その天皇の号令とは天皇自身の意志ではなく、実は彼らの号令であり、彼らは自分の欲するところを天皇の名において行ない、自分が先ずまっさきにその号令に服してみせる、自分が天皇に服す範を人民に押しつけることによって、自分の号令を押しつけるのである。

自分みずからを神と称し絶対の尊厳を人民に要求することは不可能だ。だが、自分が天皇にぬかずくことによつて天皇を神たらしめ、それを人民に押しつけることは可能なのである。そこで彼らは天皇の擁立を自分勝手に

やりながら、天皇の前にぬかずき、自分がぬかずくこと
によって天皇の尊厳を人民に強要し、その尊厳を利用し
て号令していた。

それは遠い歴史の藤原氏や武家のみの物語ではないの
だ。見たまえ。この戦争がそうではないか。実際天皇は
知らないのだ。命令してはいないのだ。ただ軍人の意志
である。満洲の一角で事変の火の手があがったという。
華北の一角で火の手が切られたという。はなはだしいか
な、総理大臣までその実相を告げ知らされていかない。何
たる軍部の専断横行であるか。しかもその軍人たるや、

かくのごとくに天皇をないがしろにし、根柢的に天皇を冒瀆ぼうとくしながら、盲目的に天皇を崇拜しているのである。ナンセンス！ ああナンセンスきわまれり。しかもこれが日本歴史を一貫する天皇制の真実の相であり、日本史の偽らざる実体なのである。

藤原氏の昔から、最も天皇を冒瀆する者が最も天皇を崇拜していた。彼らは真に骨の髄から盲目的に崇拜し、同時に天皇をもてあそび、我が身の便利の道具とし、冒瀆の限りをつくしていた。現代に至るまで、そして、現在うんぬんもなお、代議士諸公は天皇の尊厳を云々し、国民はま

た、おおむねそれを支持している。

昨年八月十五日、天皇の名によって終戦となり、天皇によって救われたと人々は言うけれども、日本歴史の証するところを見れば、常に天皇とはかかる非常の処理に對して日本歴史のあみだした独創的な作品であり、方策であり、奥の手であり、軍部はこの奥の手を本能的に知っており、我々国民またこの奥の手を本能的に待ちかまえており、かくて軍部日本人合作の大詰め的一幕が八月十五日となった。

たえがたきを忍び、忍びがたきを忍んで、朕ちんの命令に

服してくれという。すると国民は泣いて、ほかならぬ陛下の命令だから、忍びがたいけれども忍んで負けよう、と言う。嘘をつけ！　嘘をつけ！　嘘をつけ！

我ら国民は戦争をやめたくて仕方がなかったのではな
いか。竹槍たけやりをしごいて戦車に立ちむかい、土人形のごと
くにバタバタ死ぬのが厭いやでたまらなかつたのではない
か。戦争の終わることを最も切に欲していた。そのくせ、
それが言えないのだ。そして大義名分と云い、また、天
皇の命令という。忍びがたきを忍ぶという。何というカ
ラクリだろう。惨めともまたなさけない歴史的大欺瞞ぎまんで

はないか。しかも我らはその欺瞞を知らぬ。天皇の停戦命令がなければ、実際戦車に体当りをし、厭々いやいやながら勇壮に土人形となつてバタバタ死んだのだ。最も天皇を冒瀆する軍人が天皇を崇拜するがごとくに、我々国民はさのみ天皇を崇拜しないが、天皇を利用することには狎なれており、その自らの狡猾こうかつさ、大義名分というずるい看板をさとらずに、天皇の尊嚴の御利益を謳歌している。何たるカラクリ、また、狡猾さであろうか。我々はこの歴史的カラクリに憑つかれ、そして、人間の、人性の、正しい姿を失つたのである。

人間の、また人性の正しい姿とは何ぞや。欲するところを素直に欲し、厭な物を厭だと言う、要はただそれだけのことだ。好きなものを好きだという、好きな女を好きだという、大義名分だの、不義は御法度はつとだの、義理人情というニセの着物をぬぎさり、赤裸々な心になろう、この赤裸々な姿を突きとめ見つめることがまず人間の復活の第一の条件だ。そこから自分と、そして人性の、真実の誕生と、その発足が始められる。

日本国民諸君、私は諸君に、日本人および日本自体の墮落を叫ぶ。日本及び日本人は墮落しなければならぬと

叫ぶ。

天皇制が存続し、かかる歴史的カラクリが日本の観念にからみ残って作用するかぎり、日本に人間の、人性の正しい開花はのぞむことができないのだ。人間の正しい光は永遠にとざされ、真の人間的幸福も、人間的苦悩も、すべて人間の真実なる姿は日本を訪れる時がないだろう。私は日本は墮落せよと叫んでいるが、実際の意味はあべこべであり、現在の日本が、そして日本的思考が、現に大いなる墮落に沈淪しているのであって、我我はかかる封建遺性のカラクリにみちた「健全なる道義」から

転落し、裸となつて眞実の大地へ降り立たなければならぬ。我々は「健全なる道義」から墮落することによつて、眞実の人間へ復歸しなければならぬ。

天皇制だの、武士道だの、耐乏の精神だの、五十銭を三十銭にねぎる美德だの、かかるもろもろのニセの着物をはぎとり、裸となり、ともかく人間となつて出発し直す必要がある。さもなければ、我々は再び昔日の欺瞞の国へ逆戻りするばかりではないか。まず裸となり、とらわれたるタブーをすて、己れの眞実の声をもとめよ。未亡人は恋愛し地獄へ墮ちよ。復員軍人は闇屋となれ。墮

落自体は悪いことにきまっているが、モトデをかけずにホンモノをつかみだすことはできない。表面の綺麗ごとで真実の代償を求めることは無理であり、血を賭け、肉を賭け、真実の悲鳴を賭けねばならぬ。墮落すべき時には、まっとうに、まっさかさまに墮ちねばならぬ。道義頹廢、混乱せよ。血を流し、毒にまみれよ。まず地獄の門をくぐって天国へよじ登らねばならない。手と足の二十本の爪を血ににじませ、はぎ落して、じりじりと天国へ近づく以外に道があるうか。

墮落自体は常につまらぬものであり、悪であるにすぎ

ないけれども、墮落のもつ性格の一つには孤独という偉大なる人間の真相が蔽として存している。すなわち墮落は常に孤独なものであり、他の人々に見すてられ、父母にまで見すてられ、ただみずからに頼る以外に術のない宿命を帯びている。

善人は気楽なもので、父母兄弟、人間共の虚むなしい義理や約束の上に安眠し、社会制度というものに全身を投げかけて平然として死んで行く。だが墮落者は常にそこからハミだして、ただ一人曠野を歩いて行くのである。悪徳はつまらぬものであるけれども、孤独という通路は神

に通じる道であり、善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや、とはこの道だ。キリストが淫売婦にぬかずくのもこの曠野のひとり行く道に對してであり、この道だけが天国に通じているのだ。何万、何億の墮落者は常に天国に至り得ず、むなしく地獄をひとりさまようにしても、この道が天国に通じているということに変わりはない。

悲しいかな、人間の真相はここにある。しかり、実に悲しいかな、人間の真相はここにある。この真相は社会制度により、政治によって、永遠に救い得べきものでは

ない。

がくどう

尾崎**がくどう**堂は政治の神様だといっているのであるが、終戦後、世界聯邦論ということ唱えはじめた。彼によると、原始的な人間は部落と部落で対立していた。明治までの日本には、まだ日本という観念がなく、藩と藩とで対立しており、日本人ではなく、藩人であった。そこで非藩人というものが現われ、藩の対立意識を打破することによって、日本人が誕生したのである。現在の日本人は日本人で、国によって対立しているが、明治における非藩人のごとく、非国民となり、国家意識を破ることによつ

て国際人となることが必要で、非国民とは大いに名誉な言葉であると称している。これが彼の世界聯邦論の根柢で、日本人だの米国人だの中国人だのと区別するのはなお原始的思想の残りに憑つかれてのことであり、世界人となり、万民国籍の区別など失うのが正しいという論である。一応傾聴すべき論であり、日本人の血などと称して後生大事にまもるべき血などあるはずがない、と放言するあたり、いささか鬼気を感じせしむる凄味すごみがあるのだが、私の記憶に誤りがなければ彼の夫人はイギリス人のはずであり、日本人の女房があり、日本人の娘があると、な

かなかこうは言いきれない。

だが、私はあえて罅堂に問う。罅堂いわく、原始人は部落と部落で対立し、少し進んで藩と藩で対立し、国と国とで対立し、所詮対立は文化の低いせいだというが、果して然りや。罅堂は人間というだいじなことを忘れているのだ。

対立感情は文化の低いせいだというが、国と国との対立がなくなっても、人間同志、一人と一人の対立は永遠になくならぬ。むしろ、文化の進むにつれて、この対立は激しくなるばかりなのである。

原始人の生活においては、家庭というものは確立しておらず、多夫多妻野合であり、嫉妬しつともすくなく、個の対立というものはきわめて稀薄だ。文化の進むにつれて家庭の姿は明確となり、個の対立は激化し、尖鋭化する一方なのである。

この人間の対立、この基本的な、最大の深淵しんえんを忘れて対立感情を論じ、世界聯邦論を唱え、人間の幸福を論じて、それが何のマジナイになるというのか。家庭の対立、個人の対立、これを忘れて人間の幸福を論ずるなどとは馬鹿げきった話であり、しかして、政治というものは、

元来こういうものなのである。

共産主義も要するに世界聯邦論の一つであるが、彼らも人間の対立について、人間について、人性について、罅堂と大同小異の不用意を暴露している。けだし、政治は、人間に、また、人性にふれることは不可能なのだ。

政治、そして社会制度は目のあらい網であり、人間は永遠に網にかからぬ魚である。天皇制というカラクリを打破して新たな制度をつくっても、それも所詮カラクリの一つの進化にすぎないこともまぬがれがたい運命なのだ。人間は常に網からこぼれ、墮落し、そして制度は人

間によって復讐される。

私は元来世界聯邦も大いに結構だと思っており、罅堂の説くごとく、まもるに価する日本人の血などありはしないと思っっているが、しかしそれによって人間が幸福になりうるか、人間の幸福はそういうところには存在しない。人の真実の生活はさようなところには存在しない。日本人が世界人になることは不可能ではなく、実は案外簡単になりうるものであるのだが、人間と人間、個の対立というものは永遠に失われるべきものではなく、しかし人間の真実の生活とは、常にただこの個の対立の生

活の中に存しておる。この生活は世界聯邦論だの共産主義などというものがいかように逆立ちしても、どうなし得るものでもない。しかし、この個の生活により、その魂の声を吐くものを文学という。文学は常に制度の、また、政治への反逆であり、人間の制度に対する復讐であり、しかして、その反逆と復讐によって政治に協力しているのだ。反逆自体が協力なのだ。愛情なのだ。これは文学の宿命であり、文学と政治との絶対不変の関係なのである。

人間の一生ははかないものだが、また、しかし、人間

というものはベラボーなオプチミストでトンチンカンなわけのわからぬオツチヨコチヨイの存在で、あの戦争の最中、東京の人たちの大半は家をやかれ、壕にすみ、雨にぬれ、行きたくても行き場がないとこぼしていたが、そういう人もいたかも知れぬが、しかし、この生活に妙な落ち着きと訣別けつべつしがたい愛情を感じだしていた人間も少なくなかったはずで、雨にはぬれ、爆撃にはビクビクしながら、その毎日を結構たのしみはじめていたオプチミストが少なくなかった。私の近所のオカミサンは爆撃のない日は退屈ねと井戸端会議でふともらして皆に笑わ

れてごまかしたが、笑った方も案外本音はそうなのだと私は思った。闇の女は社会制度の欠陥だと言うが、私たちの多くは徴用されて機械にからみついていた時よりもおもしろいと思っっているかも知れず、女に制服をきせて号令かけて働かせて、その生活が健全だと断定はなしうべきものではない。

生々流転、無限なる人間の永遠の未来に対して、我々の一生などは露の命であるにすぎず、その我々が絶対不変の制度だの永遠の幸福を云々し未来に対して約束するなどチヨコザイ千万なナンセンスにすぎない。無限また

永遠の時間に対して、その人間の進化に対して、恐るべき冒瀆ぼうとくではないか。我々のなしうることは、ただ、少しずつよくなれということ、人間の墮落の限界も、実は案外、その程度でしかあり得ない。人は無限に墮ちきれるほど堅牢けんろうな精神にめぐまれていない。何物かカラクリにたよって落下をくいとめずすにいられなくなるであろう。そのカラクリをつくり、そのカラクリをくずし、そして人間はすすむ。墮落は制度の母胎であり、そのせつない人間の真相を我我はまず最もきびしく見つめることが必要なだけだ。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館